

投稿

総合基本計画前期は、2017年度を初年度、2021年度を目標年度、計画後期は2022年度を初年度とし2026年度を目標年度と設定しています。計画前期では、「かけがえない地下水の保全」の施策目標を「良好な地下水の維持」とし、硝酸性窒素濃度を基準年2016年度4.71mg/L、目標年度2021年度4.66mg/Lとしていきます。計画後期では2020年度4.81mg/Lを基準とし目標年度2026年4.40mg/Lとしています。

市総合基本計画の「良好な地下水の維持」に関わる問題点

宮古島地下水研究会 友利 直樹(医学博士)

まず、問題点は基本となる数値の齟齬です。地下水モニタリング調査報告書では、2016年度地下水硝酸性窒素濃度4.84mg/Lとなっており、基本計画では4.71mg/Lと記載されています。基準となる年度の数値が正式の報告書と異なることは、この計画の直近5年間平均濃度5.05mg/Lであり、2020年は4.82mg/Lです。前期計画開始後の5年間で、硝酸性窒素濃度は0.23mg/L減少しています。変動差の範囲なのか施策による減少効果なのかまず検証しなければなりません。

そのうえで目標値を設定する必要があります。2020年度再増加の原

このように経年変動する中で2026年度目標値を4.40mg/Lにした根拠が分かりません。硝酸性窒素濃度の有意の減少を見るためには、単年度の数値目標設定ではなく、5年単位の平均濃度が良いのではないかと考えられます。千数百人に及ぶ陸自駐屯地隊員や家族からの生活雑排水処理水に含まれる窒素の地下水への負荷の増加が考えら

因の1つとして、新たに追加した千代田駐屯地北側井戸の硝酸性窒素濃度平均値が8.15mg/Lと非常に高く、全体の平均を押し上げた可能性があります。千数百人に及ぶ陸自駐屯地隊員や家族からの生活雑排水処理水に含まれる窒素の地下水への負荷の増加が考えら

分なことです。削減目標値実現のために必要な予算や達成の為の具体的方法が十分示されていません。家畜し尿適正処理の実態調査がなく、適正処理のための堆肥設置の補助も少額です。年間肥料販売量と内訳及び使用量の実態調査がありません。高度化成肥料から緩効性肥料や緑肥、有機肥料への転換の数値目標を設定し、達成する為の具体的施策を行う必要があります。下水道人口普及率、合併処理浄化槽人口普及率共に16%程度であり殆ど広がっていません。一番の問題点は、日本で最も使用量の多いネオニコチノイド系殺虫剤等の化学農薬の地下水汚染に対する現状把握と汚染防止対策が全く欠落している事です。今後の10年は、地下水保全・利用を持続可能にする為の大事な分岐点です。後期計画ではしっかりと見直す必要があります。行政は、市民や審議

	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2026年 目標値
硝酸性窒素濃度 (mg/L)	4.84	4.99	4.41	4.39	4.81	4.40